

あの森を訪ねて 第3回

山から海へ「金目川水紀行」

第1回目「春嶽水源林」から

林道てくてく 第4回

かつての林道を訪ねて

「丹沢林道」「柏木林道」



大山と春嶽水源林

今回は、「あの森を訪ねて」と「林道てくてく」の合併版である。

「あの森を訪ねて」は、春嶽水源林から始まる金目川水紀行とし、「林道てくてく」は、今は県道となっている「丹沢林道」といわゆる「柏木林道」を歩く。

金目川

県内だけで流域が完結する中小河川は数多くある。金目川もその内の1つである。

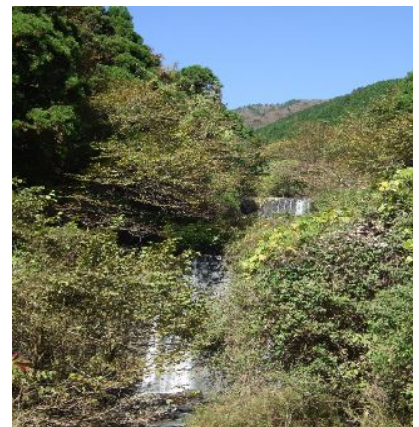
金目川は延長21km、源から海までの標高差950mの2級河川である。

丹沢山中に源を発し、蕨毛の集落まで標高差600m余を一気に下った後、勾配を緩め秦野盆地の東端を流れ、湘南平野の水田を潤しながら渋田川と合流し、花水川と名を変えて相模湾に注ぐ。

今見る金目川は、静かな流れの穏やかな川であるが、昔から大雨のたびごとに洪水を引き起こし、

田畑を埋め家々を押し流す暴れ川であり、また、水田に欠かせない水を巡って水争いが絶えなかった川でもあった。

そして、源流の春嶽水源林のある脆弱な山地は、大雨により土石流をたびたび引き起こし、下流に甚大な被害を与えてきた。



春嶽山から流れ出る水

山へ

「山から海へ」であるから、まず山へ行かなければならない。

秦野駅から登山客であふれるヤビツ峠行きのバスに乗る。

蕨毛からヤビツ峠までは、およそ6km、標高差は460m。

県道とはいっても、蕨毛から菜の花台までの道は、林道の面影を残し、道幅が狭い上にカーブ多く、歩くには少々危険である。

そのため、約3.5kmほど先の菜の花台まではバスに乗る。

丹沢林道（林道てくてく）

この道は、県道70号線秦野清川線となっているが、昭和25年（1950）、6月までは「丹沢林道」と呼ばれる林道であった。

昭和6年（1931）に丹沢奥地の皇室御料林が県に下賜されたことをきっかけに、丹沢奥地林の開発を推進するために作られた林道である。御料林の前身は、幕府直轄の御林で、明治の官民区分により皇室林に編入された森林である。

林道が開通するまでは、蓑毛から丹沢奥地に通じる道は人や馬が通れる山道だけであった。

丹沢林道の開設

丹沢林道は、昭和7年（1932）に着工した。延長26.6km、幅員4mの自動車道で、蓑毛、札掛、塩水、中津川の4工区に分割して施工され、2ヶ年で完成した。

随道2、橋梁26を含む大工事を建設機械の十分でない人力中心の時代にあって驚異的速さである。

事業費は、諸戸山林及び地元秦野町等の寄付金や山村開発低利資金、県費、国庫補助金等で、総額17万3985円であった。

昭和9年の東京朝日新聞は、400人の人達が参集して開かれた開通式の模様を伝えている。

『奔流を越え、山肌を縫い丹沢を貫く恵みの林道』＝けふ札掛で開通の挙式＝の見出しとともに、「宮が瀬村から中群東秦野村まで溪谷、断崖を貫通して、延長2万6千メートルに及ぶ豪放雄大なドライブウエーは県下の誇りなり」と記し、地元の喜びを伝えている。この道が林道であったことを知

る人は少ないが、丹沢の森林を語る時には、欠かせない道である。

林道から県道へ

昭和18年（1844）の豪雨で甚大な被害を受けた。

昭和23年（1948）年4月に、地元市町で結成された「丹沢林道復旧工事期成同盟会」から本格的復旧を願う陳情があり、知事の視察等も行われた。丹沢を横断する唯一の道路ということや本格的な復旧を行うためには、林道では限界があるために、県道に移管されることになったと思われる。

菜の花台

菜の花台は、標高約600m。晴れた時の眺望が素晴らしい。

眼下には秦野盆地いっぱい広がる秦野市街。そして、その先には相模湾に浮かぶ江ノ島から伊豆半島までが一望のもとに見渡せる。



菜の花台園地と富士山

秦野盆地は、県内唯一の盆地で、渋沢断層の隆起によって造られ、金目川の流路も今の形に変わった。

盆地の深層部には、丹沢山地から流れ込む地下水が蓄えられ、その量は芦ノ湖の1.5倍の3億トンといわれ、湧水が市内の各所に湧出している。この豊富な地下水は、秦野市水道の約70%を賄う。



秦野盆地と秦野市街

道路沿いに続く植林地

菜の花台からの道は、道路の拡幅工事も行われており勾配も緩く、時おり通る車に注意すれば、歩きやすい道である。

道の周辺には、良く手入れされた60年生程と思われる東西田原共有林の見事なヒノキ林が続く。

ここまで育ててきた長い年月と人々の労苦が偲ばれる。



道沿いに続く植林地

しかし昨今、この立派な木を売っても、所有者の手にする金額は再造林さえままならないわずかな金額であると聞くと、無念という言葉を超えて憤りさえ感じられる。

経済原則だけで価値を判断しないで、長期間にわたり森林として果たしてきた公益性を評価し、報いる方法はないものだろうか。

表丹沢林道の入り口を過ぎると、もろい岩盤の急峻な山となり、路肩の古い石積等からも難工事であったことが伺える。

ヤビツ峠

標高761mのヤビツ峠に着いた。ここは大山や丹沢縦走への登山口の一つで駐車場やトイレなどが整備されている。名前の由来は、山道の改修の時に「矢櫃」見つかったことによるという。

武田信玄と北条氏康による戦いがあった場所の一つでもある。

そのまま道を進めば、県内随一の美林を誇る諸戸山林の山を過ぎ、県立札掛森の家のある札掛地区を通り、宮が瀬湖に至る。

諸戸山林の森林は、三重県桑名の諸戸氏が明治29年に荒廃した雑木林と萱場938haを買い入れ、苗木を三重県から二宮まで船で運び、ヤビツ峠を馬の背で超えて植えられたものである。

水源涵養林春嶽山の碑

峠の入口に建てられた春嶽水源林のいわれを記した石碑を見る。

この碑は、水を治めるものは山を治める「治山治水」の歴史を伝えている。



記念碑と柏木林道入口

昨今、森林の持つ水源涵養や山地保全機能が注目されているが、はるか昔から、数々の悲惨な経験を通して治山、治水のためには何をすべきかを理解し、実践した人々の思いが伝わってくる。

碑文

『春嶽山は、丹沢山塊の南端に位置し、霊峰大山に接している。面積は、これより東南の斜面137haに及び、金目川の水源として、古くから流域住民の生活用水として欠かせない役目を果たしてきたが、長い歴史の中で、洪水や山津波にたびたび見舞われた。

このため、治山治水を痛感し、明治45年、平塚・秦野・伊勢原の1町9ヶ村の代表者が、当時の土地所有者と160年間に及ぶ地上権契約を結び、水害予防と水源涵養のため、造林事業や砂防工事に務めた。この間、大正12年の関東大震災及び第二次世界大戦による乱伐で後輩の極に達したが、その後林道整備や育林管理に心血を注ぎ緑を回復した。一方、歳月の流れの中で、所有者や地上権者も数多く変遷した。

昭和27年4月、平塚・秦野・伊勢原の3市で組織する金目川水害予防組合が地上権を取得し、更に昭和58年11月、土地所有者からの申し出を受け、春嶽山の所有権を取得した。

緑潤うこの山は、先人達の積年の苦勞の結晶による尊い遺産であり、これを後世に伝えるために、この記念碑を建立する。金目川水害予防組合』

秦野市史によると、この地は江戸時代、蓑毛村の領主揖斐与右衛門の地頭御林であったのが村に渡され、その後、幕末の山林開発奨励策もあり、文久3年(1863)、今の品川区にあった大井村の百姓平林九兵衛が隣接する運上山の16ヶ村入会地1500町歩を買い取った後、この地を買い入れた。

所有者の変遷は、その後も続き

明治の末以降は碑文による。

金目川水害予防組合

金目川水害予防組合は、県内にある24の一部組合の1つである。

平塚市、秦野市、伊勢原市で組織され、金目川の水害予防及び沿岸耕地の灌漑用水の水源涵養のため137haの山林の管理、処分にすることを目的に、昭和26年に設立された。

春嶽水源林

水源林は、全域が丹沢大山国定公園、水源涵養や土砂流出防備保安林に指定され、金目川は砂防指定地となっている。

森林は、137haの約60%がヒノキを主体とした人工林であり、また、全面積の半数以上が平成9年度から県により進められている「水源の森林づくり」事業の森林整備協定の契約地となっている。

山から里へ

いよいよ海を目指して山を下ることにする。まず、水源林の中を通る「柏木林道」を下る。林道とはいってもこの道は車道ではなく山道である。

春嶽水源林の出口にあたる蓑毛の篤志家柏木幹太氏が私財4600余円を投じて、昭和6年11月に着工し、翌年3月に完成させた幅員2m、延長2412mの道である。

幹太氏は、丹沢開拓の先駆者として、林道名に名を残し、顕彰碑も建てられている。

今もヤビツ峠への登山道として多くの人に利用されている。

現在、道幅は開設当時の半分ほどになっているが、岩を穿ち、石を積み上げた箇所が所々に残っている。よくぞやったと感心するとともに、その熱意が伝わってくる。



当時の石積が残る柏木林道

登山者とすれ違いながら、1時間ほど下ると金目川に作られた堰堤に着く。清冽な水が岩を噛みながら勢いよく流れている。

水源林内には、関東大震災による土石流被害の復旧工事として、堰堤が階段状に全部で9基作られており、最上流部は高さ12、5m、堤長38mの春嶽堰堤である。

ここから、道は舗装された車道となる。土石流で移転した宿坊跡が残る元宿を過ぎると、常夜灯のある大山参詣道との分かれ道。家の建ち並ぶ蓑毛の集落に入った。

蓑毛は、大山参詣の西の入口で宿坊があり、御師がいた。



水源林下流の蓑毛の集落

小田急線が昭和2年(1927)に開通すると、伊勢原からの参詣客が増え、蓑毛からの参詣客が激

減し、宿坊の廃業が相次いだ。

参詣者は、大日堂脇の金剛水と呼ばれる湧水で身を清めてから参詣したというが、湧水は見られなかった。

里から町へ

直接川沿いを歩けないところは、近傍の道を選ぶことにした。

僅かに往時の面影が残る蓑毛の集落を抜け、東田原への道に行く。

川沿いには溪畔林が残り、段丘上には畑や水田、路傍には道祖神がひっそり佇む山里の風景が続く。

東田原の道からは、広がる水田や畑が見渡せ、山の彼方には白い富士山が輝いている。懐かしく、心なごまされる風景である。



東田原の風景

国道を超えた所で葛葉川と合流する。葛葉川を少し遡ると、20年前にかながわナショナルトラスト指定第1号となった葛葉緑地があり、園地として整備されている。

この付近までは、川というより沢という感じであったが、葛葉川と合流して、川らしく、そして町中の川となる。川沿いには住宅地や団地が立ち並び、川岸の所々にある公園では子供たちが遊ぶ。

川の中では、今では珍しい木工沈床の工事も行われていた。

木材の利用が増えれば、森林を

元気にすることが出来るということで、治山や林道の工事だけでなく他部局の工事でも、できる限り使用するように努めているとのことである。



木工沈床の河川工事

小学校の側の桜並木の小公園を過ぎ、十代橋、天王下橋へと歩く。

弘法山が迫ってきた。盆地の出口に近づいたようである。

弘法橋を過ぎると、秦野市の中心部を流れる水無川と合流し、水の流れは勢いを増し、弘法山の山裾を流れ下る。

第1回目はここまで、次は海へ。



大山と春嶽水源林を望む



弘法山と金目川

(2008、11 事務局 瀧澤)